

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：34302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870889

研究課題名(和文)ベトナムのシングル女性と福祉に関する人類学的研究

研究課題名(英文)An anthropological study of singled woman and welfare in Vietnam

## 研究代表者

伊藤 まり子 (ITO, Mariko)

京都外国語大学・外国語学部・非常勤講師

研究者番号：70640887

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ベトナムにおける宗教組織とそこでのシングル女性の活動のあり方の分析を通じて、家父長的な当該社会におけるシングル女性の生活世界を具体的に検証することを目的に、文化人類学的調査を実施した。

調査は主にホーチミン市(南部地域)で活動するカオダイ教系の宗教組織を対象に、H25年度8月、2月、H26年度8月、2月、H27年度8月の間の合計4か月間実施した。その結果、代表者が長年実施してきたハノイの組織と比較可能な程度の資料を収集することができた。またそれらの分析から、宗教組織の社会的意味と、その活動に参加しながら自らの生を再編し生きるシングル女性の生活世界について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, I have been conducting anthropological field work, focusing on the activities and relationship among single women in a religious community in urban area of Vietnam. There are three important factors I had to pay attention to for understanding on this theme. The first one is the traditional idea about body and soul of women in Vietnam society, the second is associated with Cao Daiism temple community on which my study has focused, and the third is the Vietnamese women's life course, especially life course for single and divorced middle aged women. Through the analysis of these subjects, I have tried to clarify the relationship between single women's life course and religious activities. And I have also reconsidered the definition of welfare with the context of religious community in contemporary Vietnamese society.

研究分野：文化人類学 ベトナム地域研究

キーワード：シングル 女性 宗教 コミュニティ 福祉 ライフヒストリー 比較 ベトナム社会

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ベトナム社会は、仏教、道教、儒教を基層とする多様な信仰体系を有しており、それらは人びとの生活世界の細部にまで色濃く映しだされる。とりわけ女性たちのライフコースを考えるうえで、宗教は欠かすことのできない要素といえる。しかし、ベトナムの女性たちにとって、宗教がどのような意味をもつのか、彼女たちの生、すなわちライフコースと宗教組織における活動がどのように関係しているのかを検討する実証的な研究は、近年ようやく個人の仏教実践に関する人類学的研究が報告されたに過ぎない[cf. Soucy2012]。

本研究では、ベトナム固有の民俗宗教であるカオダイ教の組織を対象にして、人類学的調査を実施することで、ベトナム女性と宗教に関する研究の陥穽を補填することを目指した。



図1：インドシナ半島地図

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、第一に、ベトナムにおける宗教組織の活動の実態を、社会福祉運動としての側面に着目して考察することである。先進諸国がそれぞれに実施する公的な福祉政策との比較において、ベトナムはそれが未発達であることが指摘される一方で、宗教

組織基盤のインフォーマルな社会福祉活動は「慈善事業」とよばれ、様々に取り組みられている。本科研では、そうした活動に主体的に参加する女性たちについて実証的に明らかにすることを目的とした。

(2) 第二の目的は、こうした宗教組織に主体的に参加し活動する女性たちの調査を通じて、ベトナム社会におけるシングル女性の生活世界について明らかにすることである。

代表者がこれまで調査対象としてきた宗教組織では、夫のいないシングルの状況を生きる女性たちが比較的多く参加していた。そこで本研究では、家父長制が強調されるベトナムにおいて、夫がいないシングルの状況を生きる女性たちが、宗教といかに関わり、自らの生活世界を再編しているのか検討した。

## 3. 研究の方法

(1) 調査の対象は、カオダイ教のなかでも第2位の規模にあたるバンチンダオ派の二つの支部、「首都ハノイ聖室(以下、H 聖室)」と「ドータイン聖室(D 聖室)」である。筆者はこれまで、ベトナムの首都で、北部地域の中心地でもあるハノイで活動するH 聖室に焦点をあてて人類学的調査に取り組んできた。これをふまえて本研究では、南部地域の中心地であるホーチミン市で活動するD 聖室についての調査を新たに実施した。調査の方法は以下の通りである。

初年度にあたるH25年度は、8月と2月に各2週間のフィールド調査を実施した。調査は基本的に、ホーチミン市の中心である第1区のホテルに投宿しながら、D 聖室を訪問する形式でおこなった。

調査内容は次のとおりである。 組織につ

いて(組織体制、組織運営、活動形態)、信者の活動について1(宗教的实践:教義解釈、礼拝、瞑想、読経、儀礼参加等)、信者の活動について2(社会福祉活動:医療、教育、菜食レストラン経営、災害支援等)、信者の社会的属性(出身地、家族構成、活動歴、入信・入会の動機、組織の中の役職等)、信者のライフストーリーの記録、信者の出身村落との関わりの把握(出身村落における祖先祭祀、家族、親族内での位置づけ)。

以上の項目について、信者たちへの聞き取り調査を通じて、個別事例の把握に努めた。

二年目のH26年度は、8月~9月と、2月~3月にかけて、それぞれ1ヶ月ずつの調査を、初年度と同じ方法で実施した。調査では、昨年度同様の調査項目について、個別の聞き取り調査を実施しながら、期間中に開催された儀礼にも参加し、信者たちの儀礼実践について観察した。

最終年度のH27年度は、8月に3週間のフィールド調査を実施し、同様の項目について補足の聞き取り調査を実施した。



写真1: D聖室施設概観

#### 4. 研究成果

##### (1) D聖室組織について

D聖室は、バンチンダオ派本山であるアン・ホイ聖会所属の一聖室として、現在の第6区

にあたる地域を教区として、1960年代に設立された。第6区は、第5区に隣接している。第5区、第6区の一帯は、通称チョロン地区と呼ばれる華人街で、現在も華人が多く暮らす地域である。そのためD聖室所属の信者の中にも、華僑にルーツも持つ者が含まれている。南北ベトナム統一以前にはサイゴンと呼ばれた第1区、第3区にあたる中心街とは異なり、フランス植民地時代から、華僑や少数民族など、多様なエスニシティが混在する地域であった。

先行研究によると、D聖室は、1970年代にバンチンダオ派本山内での勢力争いによって、本山組織であるアン・ホイ聖会と袂を分かち、独立したことが指摘される[Blagov2002]。しかし、それに関する詳細や、現状については明らかではなかった。

本研究の調査を通じて明らかになった点は、現在のD聖室は、メコンデルタの中州に位置するベンチェ省本山との交流もあり、信者たちの行き来も頻繁にみられる点である。例えば、信者の職位(組織内における役職)の昇格については、D聖室管理委員会内での議論をふまえて、代表がアン・ホイ聖会に書類を提出したのち、聖会側から最終的な決定が下される。また、以前はD聖室に所属していた女性出家者が、アン・ホイ聖会に拠点を移し、そこでの役職に就いている事例も確認できた。これらの点を考慮すると、D聖室は、聖会から分裂した独立組織として活動しているわけではなく、人事を含む組織運営に関わる様々な面で、アン・ホイ聖会傘下にあることが推測される。

D聖室の所属信者数は、組織運営に関わる信者へのインタビューによると、500名を超えるとのことであったが、その大半が60歳代

以上の高齢者で、組織の高齢化と、若年の信者の減少による後継者不足問題が深刻化している。

組織体制は、中高齢の男性信者を中心に構成される組織管理委員会を核として、儀礼班、慈善班、建設班、台所班等、他のカオダイ教組織と同様の体制を敷くが、信者の高齢化は、これら組織体制にも影響を及ぼしていることが指摘できる。

また、所属信者数の男女の内訳については、正確な数字は不明だが、圧倒的に女性が多く、ここでも、ハノイで活動する H 聖室同様に、中高齢の女性が大半を占め、活動の主体となっていることが明らかになった。

## (2) 組織運営

D 聖室組織の運営は、信者からの個別の寄付（布施）と、聖室が経営する 2 か所の針治療院及び薬局での売上金、そして毎週日曜日に開催する医療活動による「慈善事業」で得られた収益からなる。

信者からの個別の寄付は、信者によって金額の大小はあるが、毎月の儀礼日などに布施をして徳を積むのだと、ある女性信者が語っていた。これに加えて、信者が亡くなった際に、葬送儀礼や供養儀礼を組織が執行するが、それに対する返礼として故人の家族からの寄付が寄せられる。また、信者家族の子どもの成長祈願儀礼や、家族の安寧を祈祷してもらう「星読み」と呼ばれる慣習があり、これに対しても返礼としての寄付を納める。

それ以外の組織的な寄付として、施設の大規模修繕が終了した際の儀礼や、記念の行事等の特別な機会に、「祝い金」としての寄付が、アン・ホイ聖会はじめ他の各聖室や、政府関係者から贈られる場合もある。

他方、経営する針治療院と薬局では、女性出家者 2 名と在家女性 1 名、そして針治療の男性医師が交代で勤務している。また、毎週日曜日の医療の「慈善事業」では、慈善班の女性の在家信者たちが役割分担し、働く。針治療院と薬局に勤務する者たちは有給だが、日曜日の「慈善事業」は無償のボランティアである。

こうして集められた現金は、経理が集金し、主に聖室で開催される儀礼用の供物代、施設内で提供される菜食の材料費、燃料となる薪代、飲料水を含む水道代、施設内で使われる電気代などに使われる。それぞれの班の代表者が支出の管理をして、経理に計上している。経理は 2 名の女性在家信者が担っている。

また、後述するが、施設には出家者が複数名生活している。彼らの食費、電気代、水道代は聖室組織が負担し、それ以外の個人的な支出に関しては、すべて出家者各自の自己負担となる。したがって、ある出家者は、一定の収入や貯蓄がない限り、聖室施設での生活は不可能であると語っていた。

## (3) 信者の社会的属性について

D 聖室所属の信者たちは、カオダイ教の教義にもとづき、出家者と在家者に分類される。

カオダイ教の出家者とは、未婚で、家族をもたず、聖室施設内に止住する人びとだけに限らず、婚姻経験や、女性の場合は出産経験がある場合でも、出家が認められる。そのため、婚姻して、子どもが成人したのちに出家したという信者も珍しくはない。

D 聖室には、現在、5 名の男性出家者と、8 名の女性出家者が居住している。男性出家者は 50 歳代から 80 歳代までおり、その中の 1 名は既婚者で、妻も D 聖室施設内で出家者と

して生活している。女性出家者は、40歳代から90歳代までおり、先述の夫と共に出家している女性（75歳）と、夫が夭折して寡婦となった42歳の女性以外は未婚者である。

他方、D 聖室所属の信者の大半は在家信者である。彼/彼女たちは、ホーチミン市内の各区の自宅で生活しており、第5区、6区、8区、10区、11区とその周辺区など、ホーチミン市の中心街である1区、3区よりも遅くに都市開発が進められた地区の居住者が多い。出身地の特徴はロンアン省、ベンチェ省、ティエンザン省、ミトー省など、バンチンダオ派の布教が定着した地域の出身者が目立つ。



図2：ベトナム南部地域概略図

彼/彼女たちが、ホーチミン市というベトナム最大都市の住民という点を考慮すると、その社会的属性について一括りにまとめることは難しいが、聞き取ったライフストーリーには、旧南ベトナム（ベトナム共和国）の政治体制のなかで生活を営み、南北統一後の現ベトナム共産党政権成立を背景に、不条理さを経験してきたことが示されていた。例えば、ある出家女性は、かつて英語を使う職場に勤務していたという。現ベトナム共産党政権からみると、反政府的と捉えられる生業についてとみなされた可能性は否めず、統一後

の生業について、それ以上を語ることはなかった。

「戦争経験」と表現してしまうとあまりにも安易だが、D 聖室所属の女性信者たちと、北部地域のH 聖室の女性信者たちとは、そこに含まれる意味が全く異なり、D 聖室の女性たちは現在もその不条理さを生きているといえるのかもしれない。



写真2：儀礼に集う女性信者たち

#### （4）葬送儀礼にみる女性の社会関係

本研究では、調査期間中に、2回の葬送儀礼（2014年8月と2015年8月）と、2回（2014年8月と2015年8月）の死者供養儀礼を観察することができた。これを通じて、儀礼の執行を含めた様々な場面に、家族、親族内の50歳前後の女性が所属する宗教組織のメンバーが関与していることを明らかにした。

特に注目したのが、彼/彼女たちにとっての儀礼の執行の「正確さ」である。この「正確さ」には、女性が常日頃から宗教組織とどのような関係を構築しているかが反映されると言え、その意味においてベトナム女性のライフコースの変化と宗教組織での活動は、葬送儀礼の「正確な」執行が死者の魂の扱い方に対する確認を意味することであると同時に、残された家族の生活の安寧を担保することをも意味していることを明らかにした。

## (5) 今後の展望

ベトナムにおける宗教組織についての実証的な研究が極めて限られている現状にあって、本研究は、人類学的フィールド調査を通じて、女性たちの具体的な宗教活動に関する資料を収集することができた。これらをまとめた成果は、今後、基礎資料として広く参照されていくことが考えられる。

したがって今後も、継続的に調査を続けながら、女性たちのライフヒストリーや宗教活動に関する資料について、ベトナムにおけるシングル女性と社会福祉の関わりという視点から分析をすすめ、学術論文、図書等での成果報告に取り組んでいきたい。現在、10月の学術振興会「学術図書」への申請をめざし、まとめている最中であることを付しておく。

## <引用文献>

Alexander, Soucy 2013 “The Buddha Side Gender, Power, and Buddhist Practice in Vietnam”, University of Hawaii Press.

Blagov, Sergei 2002 “Caodaism Vietnamese Traditionalism and its Leap into Modernity”, Nova.

伊藤まり子 2012 『カオダイ教八ノイ聖室の民族誌 - ベトナムの都市における女性たちの社会関係』(博士論文、総合研究大学院大学、196頁)

## 5. 主な発表論文等

[学会発表](計4件)

ITO, Mariko, ‘Avoiding a soul to float - resilience among women in religious community of contemporary northern Vietnam - ’, 9<sup>th</sup> International Convention of Asian

Scholars, 2015/7/7, Adelaide, Australia.

伊藤まり子, 「現代ベトナムの女性の社会関係と葬送儀礼 - カオダイ教コミュニティの事例から」, 「宗教と社会」学会第23回学術大会、2015年6月13日、東京「東京大学」。

ITO, Mariko, ‘Beyond the boundary of public and private; the role of ‘religious association’ in Contemporary Vietnam’, 2014 Annual Conference of EAAA, 2014/11/15, YeungNam University, Gyeongsan, South Korea.

伊藤まり子, 「はぐらかす応答、再編される道徳性 - ベトナム北部地域の宗教コミュニティにおける『逸脱した』態度をめぐって」, 2013年6月8日、日本文化人類学会第47回研究大会、東京「慶應義塾大学」。

[図書](計1件)

ITO, Mariko, ‘Living in Intimacy: A Case Study of Women’s Community at Caodaist Temple in Hanoi’, Atsufumi Kato (ed.), “Weaving Women’s Sphere: Living in between the public and private in Vietnamese societies”, Brill, Leiden, 2015, pp. 166-192.

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 まり子 (ITO, Mariko)

京都外国語大学・外国語学部・非常勤講師

研究者番号: 70640887